

# 放送人の会

No. 32  
2007・6・15

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

TEL&FAX 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com

代表幹事 今野勉 編集担当 磯村健二、伊藤雅浩、鈴木典之、長沼士朗、松尾羊一

## 第6回放送人グランプリ2007贈賞式



上段左から 「ハゲタカ」 スタッフ

「日中戦争…」 スタッフ

阿部康彦

堀切園健太郎、

宮本康宏

伊藤純

塩田純

東野真

下段 「テムジン」

「ハゲタカ」 スタッフ

「日中戦争…」 スタッフ

故実相寺夫人

故佐々木夫人

郭強 矢島良彰

大友啓史 訓覇圭

鎌倉英也 太田宏一

大脇三千代

原知佐子

佐々木直子

### グランプリ

鎌倉英也とNHKスペシャル  
『日中戦争 なぜ戦争は拡大したのか』制作スタッフ

### 特別賞 ①

訓覇圭とドラマ『ハゲタカ』制作スタッフ (NHK)

### 特別賞 ②

矢島良彰とテムジンの中国取材スタッフ

### 特別賞 ③

伊藤明彦 (元長崎放送記者)

### 特別賞 ④

大脇三千代 (中京テレビ報道部)

### 特別功労賞 ①

故・実相寺昭雄 (演出家)

### 特別功労賞 ②

故・佐々木守 (脚本家)

# 選奨経過報告

村木良彦

(選奨委・プロデューサー)

「放送人グランプリ」は今回で六回目になりました。これまで五年間は川口幹夫さんが審査委員長をお勤めになり、その審査講評がこの贈賞式の名物の一つでした。しかし、昨年式が終わった後、川口さんから「とにかくくたびれた。もう勘弁してくれ」と言われました。そこで幹事一同で相談し、「いつまでも川口さんにご負担をかけるのは申し訳ない。おやめになるのは止むを得ない」ということになりました。

今回は審査委員長なしで、それぞれの人が自由に発言をしていただく形を思い切つてとってみました。それで委員長なしで、私が選考経過だけを述べることになりました。

まず、石井彰、河野尚之、中村美美子、久野浩平、松本修の五人の方で四月十日に選考委員会を開きました。それに先立って「放送人の会」会員二百数十人が「この人に賞を差し上げたい」とノミネートをいたしました。今年ノミネートされた方の人数は約四十人です。例年五十人から六十人、昨年は七十人で、今年は非常に少なかったのですが、ノミネートの投票をした放送人の会員の数は例年と変わりません。つまり今年は非常に厳選された四十人がノミネートされたことになりました。

四月十日にそのノミネートされたリストを選考委員に配り、約2時間半議論をしました。とてもいい議論だったと思います。その結果、五人の選考委員全員が推していたNHKスペシャル「日中戦争 なぜ戦争は拡大したか」に議論が集中しました。そしてこの番組を作ったディレクター、プロデューサーの方に賞を贈ることになりました。今年は異論が出て議論が紛糾することがありませんでした。

特別賞のNHKのドラマ「ハゲタカ」は非常に難しい、企業買収というどちらかといえばドラマにし難い、しかし極めて今日的なテーマに挑戦し、非常に見事な脚本、演出、演技、そして美術、音響などスタッフの優れた総合力で完成されたと評価されました。中心になったプロデューサーの訓覇圭さんとスタッフの方に賞を差し上げようと決まりました。

同じく特別賞のNHKの中国取材班は、文化大革命について中国の民衆が初めて自分の声で生々しい体験を語る番組を作ったのですが、もう何年も前から中国を取材した優れた番組には制作会社テムジンの名前がしばしばありました。中国取材に独自の人脈、ネットワークを持つテムジンの代表岡島良彰さんとそのスタッフの方に賞を差し上げると決まりました。

三人目の特別賞の伊藤明彦さんは元長崎放送の記者でありディレクターだったので、もう大分前に退職され、

在職中から数えるともう四十数年原爆の被害者の声を取材し続けてきた方です。退職してからは昼間は肉体労働までやりながら制作費を捻出して、一人でしこしこと被爆者のなまなましい声を録音してこられたのですが、昨年はそれをまとめて8時間半ほどのCDにしました。かつての長崎放送の同僚やアナウンサーもボランティアで協力してくれたのですが、全国の図書館にこのCDを無償で送る仕事は伊藤さんが個人で費用をまかなって果たしたものです。放送局の人ではないのですが、こつこつと果たしてきた作業は「放送人とは何か」の原点への強烈な問いかけを感じさせられます。かなり多くの方からのノミネートがあり賞を差し上げると決まりました。

伊藤さんは取材のため、広島のホテルの長期滞在しておられます。私どもはやつこのホテルを探しあてて受賞のお知らせを電話で伝えました。伊藤さんは受賞を大変喜んでおられました。今日は取材の予定が既にあり、被爆者の方たちはいずれも高齢で、今日の取材もいろんな困難があつてやつととれた予定で今日をはずすと二度と取れないかもしれないとのことでした。事情はよくわかりましたので、私は電話口で「結構です。取材をなさってください」と申し上げてしまいました。

四人目の特別賞は名古屋の中京テレビの大脇三千代さんです。大脇さんはついこの前、芸術祭選奨の新人賞を受賞なりました。受賞の対象になったのは「消

える産声」という作品ですが、この作品は芸術祭のほかに民放連の報道部門の最優秀賞作でもあり、「いまさら放送人の会で……」という声もあつたのですが、やはりいいものはいいのだ、皆で拍手をしようということになりました。

特別功労賞はこれまでいろんな方に差し上げ、昨年は久世光彦さんに差し上げましたが、決して亡くなった方という賞ではありません。第1回では梅棹忠夫さんに「放送人」という言葉を初めて使った人、日本の情報論の草分けの人ということで贈りました。また、今日受賞なさるお二人の他に昨年度亡くなった放送人は沢山いらつしやるのですが、いろんな議論の末お二人に決まりました。

実相寺さんは私が説明するまでもないのですが、ドラマばかりでなくいろんなジャンルの演出をてがけ、「波の盆」で芸術祭大賞、ATP第1回グランプリを受賞なっています。その他「ウルトラマン」シリーズなどでも、抜群の映像感覚と斬新な演出で優れた作品を作りました。私と当会の代表幹事今野勉はTBSの同期で、二人ともちよつと気が引けるところはありましたが、あえてノミネートし、委員の方は五人一致して賞を差し上げると決まりました。

特別賞二人目の佐々木守さんも有名な方で、「お荷物小荷物」というユニークなドラマ、「知ってるつもり」という情報系娛樂番組先駆けの番組などを企画なさつた。で「困つたときは佐々木守」と言われ、彼のさまざまアイデアを放

送人がどれほど頼りにし、励まされたか。そんなことで故人に拍手を贈ることになりました。

以上、簡単に審査経過をご報告いたしました。

\*\*\*\*\*

## 受賞者の言葉



鎌倉英也

贈賞式では、ぼくが普段、気づかずに過ごしている懐かしい場に置かれたような暖かさを感じました。又、そこはそれぞれの現場で格闘している方々との新たな出会いの場ともなりました。本当にありがとうございます。

感謝とともに、受賞に際し、今、ぼくには三つの思いが湧いています。

ひとつは、今回のグランプリが「放送人の会」からいただいたことに対する喜びです。多くの賞が、完成した番組の「結果」を対象としている一方で今回のグランプリは、番組がときに大きな壁や逆境と闘いながら作られていること、多くの人間が関わるロケや編集の航海の道程は決して平坦ではないことを熟知されている先輩方（自らも「現場職人」であ

る会員の皆さん）が、仲間として認めてくださった証しだと思うからです。「結果」ではなく、「過程」と「意志」に向けられた賞として。「よくやった」ではなく「これから更に前進せよ」という叱咤激励の意味が込められたものと受け止めています。

ふたつめは、このグランプリを、ぼく個人のみならずクルー・スタッフ一同で分かち合えたことの大切さです。この番組の取材は、日本国内はもとより、中国・台湾・ドイツ・アメリカなど世界各地に及びました。兵士の証言や日記だけではなく、客観的事実を裏打ちするための公式記録の発掘や取材など資料も膨大でした。それらをひとつひとつ検証し積み上げていったリサーチャー・ディレクターたちがいます。

ぼくのロケの現場においては、南京での「虐殺」行為に自ら参加したという元曹長が、七〇年間、妻にも話したことがなかったという「事実」を、長い沈黙をはさみつつ語った瞬間がありました。映像取材は活字と異なり、そのような時、非日常的なあの大きなカメラとマイクが立ち会っています。それを抱えるカメラマンや音声マンたちが「記録する側」という立場から相手を見据えているだけだったら、重い口は開かれなかったことでしょう。彼らは人間として「聞く」ことに徹し、相手の瞳を見つめて、長い時間を待ち続けました。そういう時間の経過があつて撮れた証言です。誰かひとりが欠けていても今ある番組にはなっ

ていない。その重みをあらためて感じました。

みつめ。それは、この賞によって「叱咤激励」されたぼくたちが、これから何をすべきか、という問いです。この「日中戦争」の企画は、もう何十年もこのテーマを扱おうと志を持ち続けたプロデューサーたちが、粘り強く、企画会議の厚く高い壁を突破したことから生まれました。贈賞式でお会いした先輩の中にも、このテーマを現役の頃から目指していた方が沢山おられたことを知りました。そういう方々の脈々と受け継がれた精神のリレーがあつたからこそ、「南京」のような「タブー視」されがちなテーマにも挑むことができたのだと思います。

今、日本の放送現場は、作り手の自縛による萎縮と自主規制が跋扈し、伝えなければならぬことを（自分たちの護身のためからでしょうか）放棄しているように見えるときが多々あります。何に対して怒り、何に対して闘うか、本質を見失えば、ぼくたちは簡単に権力の情報機関に墮し、本当の意味での「公共性」を自ら葬り去ることになるのではないかと思います。

ぼくにとって、今回の受賞を本物にしてゆくためには、これからの現場ひとつひとつにおける挑戦が問われている。そんな厳しさを実感しています。

（NHK放送総局専任ディレクター）



訓覇 圭

この度は名誉ある賞を頂き、本当にありがとうございます。制作中は様々なトラブルがあり、一時は放送も危ぶまれていたことを思い出すと、まさに望外の喜びであり、同時に現場を知り尽くされた偉大な諸先輩方からの賞なので、特別の感慨を感じます。

実は、『ハゲタカ』の企画は、フジTVライブドア騒動に遡ります。当時NHKの社内でニュースに接した私は、大きな衝撃を受けました。私の中で、フジTVと言えば、何と言ってもこの業界のトップランナーであり、それがかくも現場から遠い会社に襲撃を受け、さらに世間はどうもライブドア支持らしい。そのことに衝撃を受けたのです。

個人的な話で恐縮ですが、私は、何だか居ても立ってもいられなくなり、信頼しているフジTVの先輩に話を聞きに行くことにしました。「狂気のD」と言われ、数々の名作バラエティーを世に送り出して来た彼なら、面白おかしく冷静に詳細を教えてくれると思ったからです。

ところが事態は私の予想を遙かに超え、ナイーブでした。彼は本気で憤り、自らの武器である番組という手段で思

うように戦えない様々な現実に苛立っていました。「モノ創りの志が金に買われてたまるか……」「モノ創り」「志」。敢えてチョイスしたであろう、あまりにフジTVバラエティーのイメージからかけ離れた言葉に戸惑っている、さらに追い討ちが来ました。「ほんとは、NHKがやるべきネタじゃない？二ヶ月以内に放送できたら数字とれるよ」

ドラマ『ハゲタカ』の企画は、全てがこの言葉から始まりました。以来、若僧なりにストーリー、キャストینگ、演出法と「NHKにしか出来ないこと」という力んだコンセプトにこだわってみました。私の中では、直接放送界のことはネタにしていなくても、基調音として「テレビ」というテーマが流れていたように思います。

贈賞式の時にも申し上げましたが、『ハゲタカ』の制作中は、潰れそうな会社の内情ばかりを取材しておりまして、時にNHKの話を書いていく錯覚に襲われ、非常に辛い日々でした。

再生のプロの話では、会社を再建させる時に一番大切なことは、創業時の理念に立ち返り、会社の遺伝子を大切にしていこうとだそうです。

今回の受賞は、私にとって、放送人の末端の遺伝子、というようなことを初めて考える機会となり、大変な誇りであると同時に改めて身の引き締まる思いでもあります。本当にありがとうございます。

余談ですが、『ハゲタカ』のきつかけ

となったフジTVの先輩の、二ヶ月どころか二年以上経ってしまっただ放送への感想は、「最初の15秒で数字は、欲しいかない番組なんだと思っただけ、こういうモノが創れる環境が羨しかった」でした。



矢島良明

表彰式の帰りの電車内で執筆依頼と一緒に渡された放送人の会31号を読んで衝撃を受けた。川口幹夫名誉会長の叫びにも似た提言が掲載されていたからだ。繰り返し不祥事が続く事態を憂いて、視聴率第一主義からの決別を「全民放の社長さん、NHKの会長さん、皆一斉に声を大にして宣言して欲しい」と呼びかけられる。「視聴率にこだわらぬ制作態度からは、本物の優れた番組が生まれてくる」と説いておられる。そう言えれば件の捏造事件をめぐって視聴率の弊害について言及した提言がどれほどあったらどうか。気になって、会社に届いているテレビ関係の機関紙に目を通して見た。驚いたことに、調査委員会報告を始め、視聴率について言及している提言は、皆無とは言わないがほとんどなかった。曰く、テレビ局と制作会社の正常な関係を、チェック機能の強化を、研修の充実を、放送倫理の徹底を、と。多

くの論調は製作現場に問題を押し付けて済ませている。中には視聴率は悪くないと丁寧に断っている提言まである。再発防止、それ自体を否定するものではないが、なぜ、問題の本質を語らないのか、視聴率至上主義を指摘しないのか。私にだってわかる。事件の根本原因が視聴率獲得を最優先とする番組構造にあったことを。デリケートで相互補完的な人体の機能を単純化して一面だけを強調し、実験の結果とスタジオの「驚き」のリアクションで大きな効果を演出する構成であったことを。「驚くべき」結論とそれを導き出す過程がテーマより先にある番組の構造によって、放送を重ねることには無理が生じていたことを。結果を導き出さなくて追い詰められ捏造に走ったディレクターは被害者であることを。

視聴率の弊害が盛んに言われたのは確か80年代だったが、それから20数年、いつのまにかその声を聞かなくなってしまった。この間に民放のドキュメンタリー番組は全滅し、ドラマは過去の名作や劇画に頼り、情報とバラエティーが安易に融合し、その結果、似たような番組ばかりになってしまった。テレビが得意とする感動や喜び、悲しみを直接、伝えることは少なくなり、スタジオの「驚き」や「笑い」を追体験することが多くなった。視聴者はいつ今のテレビを良しとしたのか。むしろ、テレビに対する関心と期待、信頼を失ってしまったのではないか。問題はどこにあるのか。不祥事が続く製作現場に身を置く者として厳

しく受け止めなければならないが、それ以上に問題の本質である視聴率至上主義を問うべきではないか。編成基準を一貫して視聴率に依っているテレビ局の姿勢を。川口名誉会長の訴えに同感である。テレビが担う使命とは、伝えるべき番組とは、この機会に改めて問い返すことが、本質的な解決に繋がるのではないかと。視聴率をもって番組を判断するかが、視聴者の本当の姿は見えて来ないのであり、視聴者と向き合うことは出来ないのではないか。何をどう伝えるのか模索も始まらなければ、制作者の創造的意欲も湧き上がってこないのではないかと。創造的意欲こそがテレビの持つ可能性を拡張し、視聴者が求めている情報と感動を伝えることが出来るのではないだろうか。テレビに対する視聴者の信頼と社会的評価を取り戻すために、川口名誉会長の提言を受けて、視聴率の弊害について語る時ではないか。テレビ番組の制作が一生を懸けるに値する、誇りある現場であることを祈りつつ、自戒を込めて。最後に、特別賞に選んで頂き心より感謝を申し上げます。



伊藤 明彦

——仮に録音構成「関ヶ原の合戦」という作品があったとします。関ヶ原の合

戦に参加した東西両軍のトップ、諸大名、侍大将、一般武士、陣笠・足軽にいたるまで数百人が、それぞれに体験した「関ヶ原の一日」を聞き取り録音し、時系列で「天下分け目の合戦」を再構成した音声作品です。

ほんとうにあつたら、どなたでも聞いてみたいと思われているのではないでしょう。長すぎる、とはお感じにならないのではないのでしょうか。

「ワートルローの合戦」でも、「スターリンググラードの攻防戦」でも同じことです。

昨年制作した音声作品「ヒロシマ ナガサキ 私たちは忘れない」は、被爆者二八四人がそれぞれの体験を語った三九四話を時系列でつづつて、一九四五年夏、広島、長崎でいったいながおこったかを、被爆者・目撃者自身の肉声によって再現した録音構成です。八時間四〇分。「被爆者の声」のタイトルで、インターネットで発信中です。ことばをすべて文字おこしし、関連静止画をつけてあります。「英語版」も準備中で、この夏には一部、発信を始めます。

大きな歴史的事件を文章でつづつた記録としては、ジョン・リードの「世界を揺るがした十日間」や、「ノルマンディー上陸作戦」をつづつた作品が思い浮かびます。しかし、A、V、CD、ネットの手法でこころみたまものはききません。また右にあげた例はいずれも「日本史上」の、「世界史上」の「大事件ですが、「人類史上」という接頭語に耐えうる

かどうか。「ヒロシマ、ナガサキ」はそれに耐ええそうなのでございとうです。

放送局を退職することによって、電波という、己の作品を発表するメディアをみずから放棄して三七年になるわたしを、いまだに「放送人」として認めてくださっている「放送人の会」のみなさまに心より感謝いたします。わたくしは今多少「ネット人」であり、作品を発表するメディアとして、「インターネット・ジャーナリズム」に期待している事情もご理解いただければと願っております。

「被爆者の声」をぜひネットでお聞きくださいますよう。巨大な放送施設も輪転機も要らず、世界に向って発信でき、「いつでも、今でも、どこにいても」うけとれるのがネット・ジャーナリズムです。（被爆者の声を記録する会ホームページ「被爆者の声」

<http://www.geocities.jp/s20hikaku/>



大脇三千代

テレビ制作の何たるか…？を全く知らずに就職してこの春で十七年。実は思っても見なかった人生…です。「何も知らない分、カラカラに乾いた

スポンジみたいにぎゅつと多くを吸収します」なんて面接で言っただけなのに、十七年たつても駆け出しのころとさして変わらない冴えない記者…なんだかな〜と嘆く日々です。そんな私が、「雲の上の人」である大先輩のみなさんから今回の賞をいただいたこと。ひとえに「出会い」の素晴らしさだと実感します。取材をさせていただいた方々との出会い、スタッフとの出会い、そして番組を覗いていただけた方との出会い…。そうした人と人とのつながりが生み出す「力」は、何にもかえがたいものだと思わなければならないのです。

世の中はどんどん「便利」になりました。そんな社会にあつて、ひとりひとりが「人らしく」誇りをもって生きていく。そのことを大切にするとどんなことなのか…。岐阜の山間の町でおきたある出来事取材しながら、今、必死で考えています。ある家族との出会いから始まったその取材を通して、私は、放送をとりまく環境がいかに「便利」になり「進化」していることも自分は現場で「とんとん、人らしく」ありたい、と考えるようになっていました。

今回賞をいただいたことを励みに、しなやかに…したたかに…：自分の歩幅で、ひとつひとつの現実に向き合っていきたいと思えます。ありがとうございます。

六月十七日の「NNNDコメント」よろしければご覧ください。ご指導いただければ幸いです。



故 実相寺昭雄氏

挨拶・故実相寺昭雄夫人

原 知佐子

受賞者の皆さんが重いのに比べ、実相寺は実に軽いですね。あんな軽い人がこんな重い賞をいただいていたのでしょうか？

あの人はまだ、「おまえ、あの会へ行つて、何か仕事貰つて来い」なんて言つて、そこらでにやにや笑つているのかもしれない。軽い、ですね。

どうもありがとうございます。



故 佐々木守氏

挨拶・故佐々木守夫人

佐々木直子

お電話いただいたときには、あの人は「ぼくは何にもいらない。無冠でいい」と言っていましたので、どうしようかと思つたのですが、昔から志を同じにしてやつてきた皆さんから頂く賞ということなので喜んでいただくことにしました。

どうもありがとうございます。

# 放送人 グランプリ 祝賀パーティー

'07・5・12

久闊、歓談、アンタ若いねえ……



# たまには気持ちのいい話を

代表幹事 今野 勉

今回の総会・懇親会には、初参加の会員がかなり見られて、嬉しいことでした。

懇親会では、ゲストはもちろんのこと、出席した会員全員の挨拶を聞きたかったのですが、出席者が多いのに時間がないというところもあって、全員の声を聞けなかったのは申し訳ないことであり、残念でした。

放送人グランプリの受賞者も例年のように懇親会に残ってくれて制作者仲間としてつづいんだ話ができただけはいつものことながら有難いことでした。

表だって話せないこと、制作者同志だから打ち明けられること、なぜこの企画が通せたのか、どうやってあの企画は通ったのか、演出の現場で何があったのか、不可能と思われる取材がなぜできたのか、なぜいま取材許可があつたのか、その意図は何か、どういう変化が底流で起きているのか、などなど、放送人の会ならではの情報交換と意見交換とひそかな激励と不敵なほほえみと握手と、それらがあちこちで行われていたこと、それがやはり感動でした。

制作者同志の交流を連帯というと格好すぎますが、まだまだ、放送界は捨てたものではないというのが私の実感でした。

もうひとつ、さらに嬉しいこと。

何人かの現役の会員から「放送人は高年齢者が多い(ありていに言えば、ご老人の集まりだ)というヤムも聞くが、そのご老体の方が今やエネルギーに満ち、志を持ち頑張っているではないか。高齢何するもので、恥じることなし」とハツパをかけられました。お世辞半分とは言え、心強い限りでした。そのハツパのかけ方のテンションの高かつたこと、これまたさすがが現役、と感じ入った次第です。

放送人の会のイベントを通じての制作者同志の交流、会員同志の交流は、これまで望まれながら中々広がりませんでした。このところ、総会への参加者の増加に見られるように、確実に広がりを見せています。これも嬉しい限りです。

そのひとつ、こと始まった句会。その第二回に参加してみました。兼題はさくらんぼ、卯浪、鱧。この会報の別面で紹介されるはずですが、ご覧のように、何と、私の拙句が五句とも票を得るといふ快挙、さらに、その一句はある人が特選に選んでくれ、もう一句は最多得票という、望外の結果。それに反して自称プロの西川阿舟主宰の句が一票もとれないという想定外の結果でした。西川主宰は凹んでおられました。ハハハ、実にうまい酒でした。

私は、大正十五年に東京で生まれた。そのころは「荏原郡世田谷村大字太子堂」といった。今の三軒茶屋の辺りだといふ。長じて父の故郷で育った。鹿児島県川辺郡勝目村という。いかにも田舎らしい名前だ。

昭和二十五年、町村合併があつた。勝目は川辺町に合併されて、名前は消えた。その川辺町がことし、また名前を変えるという。

今度は川辺・知覧両町にお隣りの頼娃が一緒になつて、名前を「南九州市」に変えるという。

私などは地名は人々に親しまれたほうがいいと思うので、大戦の特攻基地として日本人の大方に親しまれた「知覧」がいい、と思つた。

だが三町はお互いに譲り合わず、遂に南九州市という何とも味気ない名前に変わる事になった。南九州とはたしかに地域の名前だが、そこには歴史の香りや、人々のぬくもりがない。

かくして私はことしの十一月以降、本籍として「南九州市」と書くことになつた。

これまで、町村合併して昔のいい名前が消えてしまった土地に行ったりすると「なんで...?」と不審に思つたものだが、今度

はどうとう自分の故郷のことになつてしまった。

人の世のこだわりでいうとまず土地の名、そして人の名、さらには土地の物名名所古跡の名が続く。

それを一緒にたにして、新しい地名に変えてしまふ。

この「こだわり」の世に「せいづは、あんまりそつけないじゃありませんか?」。土地のイメージや歴史や人事にこだわらなければ「知覧こそ最高だと私は思つたのだが...。結局少数意見だったようだ。

## 鵜沼海岸から 25

名誉会長 川口幹夫

かくして今年十一月以降、わが故郷は「南九州市」ということになる。

こうなれば一人でもいいから自分なりこだわりに徹しよう...とも思つたが、まてまて、所詮は人の世のこと、さつさところだわりを捨てよう。

北九州市は、八幡、門司、小倉、若松などを併せて、ゆうゆうたる大工業地帯のイメージを表わしている。

これに代わつて、南九州市は、煙のカゲも見えない、すべて青い空の下、緑豊かな土地、そこに育まれる馬、羊、鶏、そして魚々...「南九州」という名前はそれらを含めてまことに見事な名前ではないか!

# 巨泉が語る！放送の未来

出演 大橋巨泉

司会 大山勝美(特別顧問)

主催 放送番組センター  
協力 放送人の会

今回は放送番組センター主催の情報通信月間行事のイベントに放送人の会が協力する立場で「大橋巨泉」のテレビ観を通して見えるテレビの過去・現在・未来を論じてもらうもの。

## 【巨泉語録の要旨】



国外と日本に住み分けているが、ITやメールでどこにいても分かる。「あるある大事典」問題にしてもテレビでは昔からやってきたことで、例えば福岡の沖で金印が発見されたなどと金印のネット造事件があった。あれと同じ。根っこは視聴率にある。テレビはメーカーみたいに当たればじゃんじゃん作るということはできない。24時間以上はない限界時間産業だ。だから深夜枠だとされていた時間を開拓するしかない。そこ

で始めたのが「11PM」で「政治からストリップまで」を番組の範囲にした。政治であれ風俗であれ、おもしろい部分をクローズアップする。だつて「朝日」の社説を毎日読んでいる人を相手にしたつてしようがない。ストリップを楽しんでいる大衆に本音で語る。これがテレビで、今問題になっている従軍慰安婦の強制連行問題にしても最初に取り上げたのは「11PM」だよ。安倍は「狭義」と「広義」に使って逃げてるが、とんでもない。都築つてディレクターが現地を取材したら、当時五十がらみになっていた元慰安婦たちが続々現れて証言した。残念ながらテープは残ってないが、われわれ世代には生々しい事実がテレビの素材だった。安倍は小学生だから知らない。知らないから「広義では」なんて言う。

「ゲバゲバ90分」はギャグに不条理の笑いを重ね、前後枠だけはオレと前武の生アドリブでその日の事件を組上し、デモの中継なんかも入れた。

とにかく日本の視聴者はおとなし過ぎる。くだらない番組はアメリカならスポンサーの商品不買運動が起きる。怪しげな占いやスピリチュアルなどというオカルト番組なら訴訟・告訴問題になる。見れば録画だと分かるゴルフ中継や「まことに残念ですが」の中継中断放送でも視聴者は怒りもしない。ナメられている。アメリカやカナダの友人にスポーツ中継など日本のテレビの現状を話したら誰も信じなかった。

日本は民主的っていうけど世界からみれば特殊な国なんです。どうしたらいい？NHKは一チャンネルにしたい。学芸会

みたいな大河ドラマや民放のマネみたいなドラマやバラエティーはやめ、愛好家のためのクオリティー番組をつくりなさい。

民放は何故バラエティーにしがみつくのか。視聴率とおろかな視聴者、それに吉本興業が存在するからだ。この三本柱の仕組みをぶつこわさないと。

すべてはVTR素材の氾濫がダメにした。編集があるから芸人に緊張感がない。第一芸がない。芸がない消耗品だからいくらでも代えられる。「フォー」芸人も消えた。そもそもバラエティーの原点はオレと井原(高忠)が作った。その亜流がまだに、いや悪貨が良貨を駆逐してのさばっている。進歩しないねえテレビは(笑い)

どうしたらテレビは良くなる？革命だよ。笑うけど、革命つてパリだつて民衆が蜂起した現象なんで、テレビだつて権力なんだからぶつこわすのは革命しなきゃいけない。

…と意気軒昂の三時間でした。

## “放送の緊迫”を語り合う小さな会

### 第2回

元BRC(放送と人権等権利に関する委員会)委員・渡辺眞次弁護士を囲んで

関西テレビ「あるある大事典」改ざん問題他、テレビの信憑性、被取材者や視聴者の人権の侵害などが社会から厳しく問われ、視聴者のテレビへの信頼が、かつてなく低下しています。

どこに問題があり、これからテレビはどうあればいいか。NHKと民放連が創る第三者機関BRCの委員をつとめた渡辺弁護士を囲み、懇談してみたいと思います。自由な場ですので、こぞつてご参加下さい。

### 記

日時：6月23日(土)午後2時  
場所：テレビマンユニオン会議室

(JR渋谷駅から徒歩。又は東京メトロ「表参道駅」下車。246青山学院大斜め前。国連大学脇の道入り奥左ビル。入口に標示のナンバーを押すと扉が開きます)

参加費：無料  
世話人：石井清司、今野勉、久野浩平ほか

※出欠は次のところへお願い致します。

■石井清司事務所 TEL:090-9333-1633

FAX:03-3594-1633

■放送人の会TEL/FAX:03-3221-0019

高橋悠治・小田実・小中陽太郎  
「しょうちゅうとゴム」復活上映・演奏つき

45年前新進気鋭の作曲家と小田実が出会った。演出家はその記録を持ち続けた。60年代の激動と現代の息吹を感じてみませんか。

日時 7月8日(日)7時開場・7時半開演  
場所 内幸町ホール(内幸町1-5-1)  
入場料 3000円



# 日韓中フォーラムの準備すすむ

## 組織委員会事務局

日韓中テレビ制作者フォーラムの第七回大会が、九月十二日(水)から十六日(日)まで中国・天津市で開催されることは、前号で速報しましたが、ここでは準備のポイントをお知らせします。

日程の中核となり、参加者全員で視聴し討議する各国出品作は、大会盛り上げのカギとなる上、作品の放映交流の可能性が出てきた今回は、選定に慎重な配慮も必要となっています。

日本組織委員会では、五月二十八日千代田放送会館に東京・大阪のキー局編成責任者に集まってもらい、事情説明と協力要請を行いました。二年前の東京大会からフォーラムの趣旨と意義は周知され、NHK、民放共にキー局を中心とする協力は積極的で、作品面の充実も進み、その結果、韓中両国の「兄貴分」「日本への注目度は一段と高まっていて、先の天津市での準備会議でも前向きなアイデアは先ず日本に打診し、期待する空気が強く感じられました。

大山組織委員長や山田事務局長らの状況報告に各局代表も熱心に耳を傾け、特に、大会開催に合わせて後援の地元・天津テレビ(中国四大電視台の一つ)が意欲を示す。日流「作品の放映計画(但し実現は大会の個別の交渉次第で、組織委員会が窓口になるわけではない)」についても、また三國間の作品交流についても、局毎に対応を検討してみることになりました。

組織委員会では六月中旬をメドに各局から自薦作品を募り、内部で構成する選考チームで、ドラマ、ドキュメンタリー、エンターテインメント別に各三本を選

定し、六月末に素材一式(作品テープとパンフレット作成資料)を中国側に届けます。作品には中国で翻訳字幕を付けて、参加者が同時視聴できるようにし、視聴会では、作品の制作者が解説・質疑応答することになっていきます。制作者は正式参加の一員として局から派遣されます。各国の代表団は約三十名で構成します。

「天津天保国際酒店」は、巨大プロジェクトが進行中の市内経済開発特区に新設された五つ星の国際イベント用ホテルで、設備の充実は申し分ありません。主催者の中国側は今、三年前の揚州大会で唯一不評を買った通訳体制の改善に取り組んでいます。東京大会での同時通訳の見事さ、交流タイムでの通訳配置の良さが今も三國関係者の語り草になっていて、天津では「東京を見習え」が運営準備の合言葉になっています。(記・鈴木典之)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 第二回放送人句会

西川 章

◇五月二十九日(火)◇於：赤坂麦屋

参加者：石橋冠、伊藤視郎、今野勉、中村フミ、新村もとを、堀川とんこう、松尾馬笑、大山勝美、西川阿舟

◇兼題：さくらんぼ、鱧、卯浪

互選の点数を集めたのは堀川とんこう氏の必ず女性の登場する「傾向俳句」でした。今野勉氏、健闘するも若干及ばず。大山勝美氏のファックス投句は当日行方不明となり、残念ながら選を受けることができません。紅一点中村フミ(芙美子)氏は初参加でした。

さくらんぼ含みし口のさようなら

さくらんぼ放りて少し泣く女

その朝の透き通る手や鱧さばく

君黙す夜の卯浪の音近し

風吹けば枝ごと光るさくらんぼ

桜桃を供えし小さき墓のあり

かといつて別るもならず鱧を釣る

細き身を隠して鱧の揚げ衣

夢捨てて卯浪立つをば見ておりぬ

鱧三尾天ぷらにして酒二合

さくらんぼ子無き女のひとり言

廃坑の無人の島に卯浪かな

アイドルは口をすぼめてさくらんぼ

鱧焼けて食堂に風吹き抜ける

ひとり身のきす焼く庭に猫二匹

青春の羞じらいみせてサクランボウ

鱧釣れず基会所なんぞ立ち寄りぬ

茄子紺の博多の帯や卯月波

江戸前や白砂に光る鱧の群れ

青鱧は幻魚になりし脚立釣り

優しさがこぼるるほどやさくらんぼ

喪服ぬぎ口をすぼめてさくらんぼ

沖卯浪ベンチに動かぬみだれ髪

己が釣りし鱧の天麩羅ことのほか

卯浪とも高速艇の波かとも

とんこう

〃

〃

〃

勉

〃

〃

〃

フミ

〃

〃

視郎

〃

〃

冠

〃

もとを

〃

馬笑

〃

〃

勝美

〃

阿舟

〃

次回放送人句会奮って御参加下さい

◇兼題：髪洗ふ、胡瓜、虹

◇七月十七日(火)六時半集合七時締切

◇於：赤坂麦屋(03-3586-9754)

# ラジオの広場

構成 石井彰

もつと自慢話をしよう！  
放送作家 藤井青銅

放送作家に成りたての若い頃、プロデューサーや先輩作家に「昔はこんな番組があったんだ、こんな無茶をしたよ」という話をよく聞かされた。最初は興味深く聞いていたのだが、何度も同じ話をされるたびに、

「なんだよ、また自慢話か」と思った。まあ、若者なら当然の反応だ。けれど、自分もすこし番組を書くようになってすぐに、それは違うんだな、と気づいた。

「自慢話でもいいから、こうやって後輩に伝えていかないと、昔の番組とスタッフの記録（と記憶）は残らない、放送っていうのはそういうものなんだ」そう思ってから私は、先輩の話を聞くのが好きになった。何度聞かされてもかまわない。先輩たちの作ってきた番組、そして（多くの）失敗作やくだらない番組を全部ひっくるめた流れの延長線上に今の自分がある。それを知ることはとても重要だ。ま、優等生的に言うところだが、功利的には先輩の自慢話から色んなヒントが得られることに気づいたからだが……

今から二十数年前のことである。

今回、『ラジオな日々』80'S R A D I O D A Y S』（小学館）という本を出したのは、そういった思いも無関係ではない。

当時私は、ニッポン放送のドン上野こと上野修さん（故人）の下でドラマを書くことから放送作家業を始めた。

「星新一ショートショートコンテスト」出身なので小説はなんとか書けたが、ドラマ脚本は素人で当然、先輩や周囲から学ぶことが多い。その頃のことを書いた本だが、事実関係はそのままに小説仕立てにした。当時の番組を知らない世代も読めるように思っ

て。だから、若い読者から、

「面白かった、ワクワクした」という感想をいただき嬉しかった。

実はこれは単なる懐かし本ではない。《何かになりたいのだけど、自分が何になれるかわからない》という、青年期に誰もが思う気持ちを描きたかった本。若い後輩（とかつての自分）に向けた本なのだ。

ここで冒頭の話に戻る。みなさんは、現在インターネット上に載っている夥しい数の放送番組の情報が、多いのはご存じでしょうか？ 最近のものはまだしも、十年やそこら昔のことになると、もういけません。実にデータが多

い。なぜなら書き込んである多くはファンだから、今までなら仲間内での噂話ですんだものが、まことしやかな「事実」としてどんどん書き込まれてしま

うからだ。彼らより若い世代は、その真偽が検証ができない。一方、事実を知る当事者はあまりネットに興味がないので見ていない。見たとしても「しょうがないなあ」で終わっている。

けれど、憶測や事情通の噂話が日々「事実」として固定されるのを黙って見過ごしていいものだろうか。そんな思いもあって私は、わずかながら知

ている事実を残そうと、今回の本を書いた。だから元現場のみなさん、自慢話をもつとしましう！

ネット上の不確かな情報ではなく、当事者による本物の話をもつと聞かせて欲しい！ 今となってはかつての手柄話も失敗談も、すべて含めて自慢になる。そういった記録と記憶をもつと残せば、そこからまた新しい何かが生まれると思うから。

.....  
ギャラクシー賞入賞作品を聴いて語り合う会のお知らせ

ギャラクシー賞ラジオ選賞委員会は、聴く機会の少ない受賞作品を参加者一同で試聴し、その制作者と語り合う会を毎年開いております。

今回は第44回ギャラクシー賞ラジオ部門大賞作品の『特集 1179』談合・その根深さを探る』（毎日放送 森崎俊雄）と同優秀作品『沈黙のラジオ』聞こえてくる「間」のチカラ』（山梨放送 山田歩）の2作品です。

2人の作品を聴き、報道とラジオ、またラジオにとって「間」とは何か、それぞれ制作者と話し合うものです。

日時 6月30日（土） 13時～17時  
会場 TBS放送センター11F  
地下鉄千代田線赤坂

参加費 1500円  
問い合わせ先 放送批評懇談会  
（☎379-5521まで）

ラジオ関係者に限らず、多方面からのご参加をお待ちしております。  
放批懇会員 放送作家 三原 治

## ラジオにひとこと

近所のご隠居が「あつし、齒、目ナント力て専らラジオだが、年寄りに評判の『ラジオ深夜便』が近ごろマンネリ気味だ。でね、宮川賢の『バツラジ』に乗り変えた。これがキテレツでアブナイ語りがいい。で、そのままTBSにしてたら丑三つどきだ。ヒドイね。まるでコンビ二前でウンコ座りしてる若者のY系談義で、グシャグシャだ。これに懲りて今日びじゃテレビを聴いている。例えば、NHK深夜テレビはN特や松平定知アナの『その時歴史』などマル再もの、これが音声で間に合っちゃう。第一、中波より音もいから団塊層はこの「テレビオ・ファン」が多いって。ついでだが、朝のテレビワイドもべけんやで。新聞各紙にオンブにだつこだもの。だつたら森本毅郎の『スタンバイ！』を寝床で聴くね。古くは『朝のファンファーレ』時代からのコンセプトは変わらない。ラジオ報道のエディタシップで聴かせる。マイカー通勤やハイヤー社長族必聴番組なんだつて。なに、ドラマはないか？ あるわけねえだろ。NHK・FM以外で台本、本読み、効果とラジオドラマの硬質な演出を継承する局なんかねえもの。だつたら『青山二丁目劇場』（文化）みたいな、声優プロに企画ぐるみ〇投げしちえばどうだい。青二プロのベテラン声優が結構きかせる。ラジオにはもうプロデューサーはいらないね。構想力あるラジオ・デザイナーを揃えなきゃ。結局寝ず仕舞いで朝だよ。あつし、さあ、朝寝だよ」（M）

# 放送人の証言 19

構成 久野浩平

今回はヴァラエティー、音楽、演芸など娯楽系のテレビ番組を作った制作者の「証言」を集めました。

まず 澤田隆治 さんです。澤田さんは一九五五年ABC（朝日放送）に入社、ラジオのお笑い番組を担当します。五七年「漫才教室」「浪曲歌合戦」などが民放祭で入賞、ラジオ制作に自信をもったまにその時、OTV（大阪テレビ）に意向、改めて新人としてテレビの修行をするのですが、テレビに移りたくない澤田さんが必死で抵抗したとは面白いことです。OTVで「びっくり捕り物帳」「やりくりアパート」を担当、藤田まこととの出会いもこの時期でした。五九年OTVはABCと合併、澤田さんの「証言」は「スチャラカ社員」でダイマル・ラケットに教えられたこと、「てなもんや三度笠」の制作体勢、スケジュール、演出理念などの時代の制作現場の姿を生々しく語ります。また、作り物の世界が嫌になり報道に移ったこと、のちに設立したプロダクションの後輩育成など、澤田さんの話題は豊富です。

「ラジオをやったことがね、ぼくにはものすごく意味があった。演出術にしてもテレビだけでやってきた人とは違うものが自分のどこかにあるように思う（中略）ラジオとテレビの関係、そんな議論を誰もしていませんか」

能條三郎 さんは四八年NHKに入局。落語、講談、漫才など演芸番組一筋に歩みました。電話がある芸人などいな

い戦災の焼跡をバスと電車とテクシーで出演交渉の時代です。面倒なGHQの検閲、落語の面白さを米軍に理解させる不毛な苦心、歌笑、金馬、志ん生をめぐる隠れたエピソードで「証言」は笑いを誘います。五七年から五九年まで能條さんはBKに転勤、関西演芸のサービスピ精神と客層の違いに驚きます。AKにもどり企画した「東西演芸大会」はこの体験によるものでした。

「東京落語会」「NHK漫才コンクール」「浪曲コンクール」「講談研究会」と番組の話題は続きます。六三年から六七年にかけての「書き下ろし新作特集」は菊田一夫、久保田万太郎、村上元三、木下順二など錚々たる作家に原稿を依頼、実力派の落語家たちと組み合わせさせて創作落語を作る、そんな挑戦的な試みでした。新作に踏み切った理由を説明します。

「落語は、大体が江戸落語で東京落語でも言葉の、ま、遊びの部分もあるし、洒落、粹でしょ。で、シャレ、イキをね、まだ娯楽に恵まれない農村や漁村の人たちを集めてやってみたって通用しない。客の方はつまらなそうな顔をしている。で、師匠は楽屋へ戻ってくるなり、なんでえ今日びの客は！ご機嫌ななめなんですよ」

つぎは 鈴木道明 さんです。戦闘機乗りだった鈴木さんは終戦をシンガポールで迎え復員後、ジャズバンドを主宰、朝日新聞を経て五一年、開局直前のラジオ東京（現TBS）に入社。大量のレコードを購入し、その整理、レコード室のたちあげ、それが最初の仕事でした。ラジオの音楽プロデューサーを勤めたあとテレビ開局で移動、「ジャズメンクラブ」のPDになりました

す。音楽番組のスタイルがまだ確立されてない時代に鈴木さんはハリウッドのミュージカル映画を参考に小節によるカメラ割りの方法を独力で開発します。六〇年代に入り外人タレント招聘のプロデューサーを引き受け、フランク・シナトラ、イヴ・モンタン、デュク・エリントン、モスクワ芸術座などの来日公演を実現、「証言」では交渉のスリリングな裏話が語られます。

「アメリカ人はね、あの、プレスリーの時にね、すごく抵抗をかんじたね。あれが出現したときにね。それからさうらに間を置いてマイケル・ジャクソンだ。これも抵抗を感じるんだよ、感じ方がね。それでもプレスリーのほうはちゃんと歌として残ってるでしょ。でもマイケル・ジャクソンは残らないって、こりゃ」

吉村光夫 さんは、四八年アナウンサーとしてNHKに入局、鹿児島局で入社。五一年開局を迎えたラジオ東京新人で経験者は七人、うち五人が満電出身者。「証言」では「マイクは語る」の芥川隆行、「浪曲天狗道場」の池谷三郎など当時の同僚たちの特技やプロフィールを語ります。五五年、テレビ開局記念番組「二人三番叟」の粋アナを担当、「ではこれで二人三脚を終わります」とやってしまったのが忘れられない。七〇年代後半、番組宣伝部に移り、自ら出演した番宣番組「夕焼けロンちゃん」が人気を呼び、宣伝される番組より視聴率が高い珍現象さえありました。ちなみにロンちゃんは長身村さんがはじめてテレビと対した思い出として。

「オーディエンスを推してもらったり、洋服を整えたりしてテレビカメラの前に座ってやるって大変なことだった。皆さん今日は、今日のお天気はなんて、これが難しい。アナウンサーは副調整室脇のブースで声だしをやる仕事で最初は多かったです。まだカメラの前に立つという度胸はね、訓練はしたけどなかなか。タレントじゃないもの」

最後に 横沢 彰 さん。横沢さんは六二年フジテレビ入社。最初は教養番組、続いてお笑い番組を担当します。四年間サンケイ新聞に意向し、制作部門に戻り幼児番組「ピンポンパン」でバラエティーに目覚めたという。「スター千一夜」を経て、お笑い番組「THE MANZAI」を立ちあげる。新人をふくめメッセイジ性の高いタレントを集め、セットもディスコ調、観客も若者中心という作りで高視聴率を獲得、お笑いの構造改革といわれた。横沢さんの「証言」は八一年から始まった

「オレたちちびょうきん族」のリハーサル無し、スタジオは遊び場という方法論で。「笑ってる場合ですよ」（八三年）から「カノッサの屈辱」の企画経緯など刺激的な話題に満ちています。「得意技、早逃げ、というか、ねばってねばって最後に没落してやめるとね名番組にはならない、だから元気があつて余裕があるうちにとりあえずやめちゃうっていうのが手だとおもってます。あんまり走りすぎて、もうダシがらみたいになってからやめると、印象としては残らないですね」

「放送人の証言」も60年後半から70年代へ入ります。「この人」という放送人を推薦してください。

お願い

会員名簿 07・6・15現在

- (あ) 合川明 青木裕子 赤井朱美  
 秋田完 新井和子 有馬哲夫 (い)  
 石井清司 石井ふく子 石井彰  
 石橋冠 磯野恭子 磯村健  
 市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩  
 井上良介 岩澤敏 岩下恒夫  
 (う) 上田千秋 碓井広義  
 歌田勝彦 宇野昭 浦田彰 (え)  
 江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子  
 (お) 大蔵雄之助 太田敬雄  
 大野木直之 大西康司 大西文一郎  
 大原誠 大原れいこ 大山勝美  
 大類啓 大脇明 岡弘道 岡崎栄  
 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明  
 沖野暁 荻野慶人 小田久栄門  
 (か) 加賀美幸子 各務孝  
 片岡敬司 片島紀男 勝部領樹  
 加藤滋紀 加藤静夫 金沢敏子  
 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫  
 上安平冽子 鴨下信一 川口健一  
 川口幹夫 川竹和夫 川平朝清  
 河邑厚徳 河村正一(き) 岸田功  
 北川泰三 北川信 北出晃  
 北村美憲 北村充史 木村栄文  
 木村成忠 (く) 楠美昌  
 工藤英博 隈部紀生  
 (こ) 小池勝次郎 河野尚行  
 児玉久男 児玉孝光 後藤和晃  
 小中陽太郎 小南武朗 近藤晋  
 今野勉(さ) 斎藤伸久 斎藤秀夫  
 斎明寺以玖子 酒井美樹男  
 寒河江正 坂元良江 桜井均  
 桜井元雄 佐々木敏三 佐々木彰  
 佐藤秀山 佐藤年 佐藤利明  
 沢口真生 澤田隆治 沢田隆三  
 (し) 重延浩 静永純一 嶋田親一  
 清水満 下重暁子 城菊子  
 (す) 菅野高至 杉澤陽太郎  
 杉田成道 鈴木克明 鈴木昭典  
 鈴木道明 鈴木紀郎 鈴木典之  
 須磨章 せんぼんよしこ  
 (そ) 曾根英二 (た) 高島秀之  
 高橋一郎 高橋啓 滝大作  
 武谷雅博 田澤正稔 田中昭男  
 田原英二 田原茂行  
 (ち) 千葉勉  
 (つ) 露木茂 鶴橋康夫  
 (と) 土居原作郎 戸田桂太  
 外崎宏司 富永卓二 土門正夫  
 (な) 中崎清栄 中澤忠正  
 中島僚 中田美知子 中谷英世  
 長沼士朗 中村敦夫 中村克史  
 中村季恵 中村耕治 中村美英子  
 中山和記 難波秀哉  
 (に) 西川章 新村もとを  
 西ヶ谷秀夫 丹羽美之  
 (の) 野崎茂 信井文夫  
 (は) 萩野靖乃 橋本潔 林健嗣  
 林裕史 原由美子 原田庸之助  
 (ひ) 備前島文夫 久野浩平  
 一杉丈夫 (ふ) 深町幸男  
 福田雅子 藤井潔 藤井チズ子  
 藤田晋也 藤久ミネ  
 (ほ) 星田良子 堀川とんこう  
 (ま) 松尾羊一 松平定知  
 松前洋一 松本明 松本修  
 松本国昭  
 (み) 三上義智 三国章 水上毅  
 水野憲一 満島保夫 三村景一  
 三村千鶴 宮川鑛一 宮脇殿雄  
 明神正(む) 村上光一 村上憲男  
 村上雅通 村上佑二 村木良彦  
 村田亨  
 (も) 守分寿男 諸橋毅一  
 (や) 八木康夫 矢島良彰  
 藪内広之 山県昭彦 山崎隆保  
 山崎裕 山路家子 山田良明  
 山田尚 大和定次 山根基世  
 山辺麻未 山本恵三  
 (ゆ) 湯浅和憲 (よ) 横沢彪  
 横山英治 吉澤保 吉永春子  
 吉村直樹 吉村光夫  
 (わ) 和田智允 渡辺紘史  
 ◎ 新会員紹介  
 重村一(ニッポン放送会長)

会員の皆様：近況やイベントの類いで会員に知らせたい記事がありましたらお寄せください。紙面に紹介させていただきますので……

編集後記

「三升かな」「いや五升だろう」  
 「そんなもんじゃない、一斗甕だ」  
 例によって編集部のお助共が「久米仙」とある甕を眺めてる。格蘭プリ懇親会の宴にと去年の受賞者沖繩の上原直彦さんから贈って戴き、元酒仙の会員たちが群がったが寄る年波だ、到底飲みきれぬ。大分中身が残った甕を北村さんが事務局まで運んでくれた。

◆「ところで泡盛って名だが……」  
 「二説ある。かつては原料に粟を用いたから。今一つは、蒸留の際、導管から垂れてくる酒液が受け壺に落ちるとき泡が盛り上がる。その状態を見て泡盛る」と叫んだからという説。醸造学の清泉武夫教授は後者の説をとっている。◆いやまだある。薩摩藩が琉球侵略で手中にした蒸留酒を薩摩の焼酎と差別化し、江戸でのブランド化を図った際に「泡盛」と命名して売り出したという説。まだある。古代インドのサンスクリットでは酒のことを「アワムリ」と発音した。いや、ベースのシャム米を泡のように細かく砕いたから。

◆例によって放送人の会特有のウンチクが飛び交うや、事務所内はいつしか芳醇の薫り漂い、陶然の境地。「だからさ、『あるある大事典』問題なんて言論の自由がどうのこうのと青臭い立論じゃなく、エセ科学ねつ造のいかかわしさに激む自らを恥じ、『美の壺』(NHK教養)的にああでもない、こうでもないって諸説横義の構成をすべきだったのだ」といつしかテレビ論議に脱線。さて、飲み直そうか。(M)